

2 対象地の現状

1 対象地の特性

(1) 社会環境

本構想の対象地である広町地区は、国道 134 号、県道腰越大船線等の市内主要道から住宅団地内に入った箇所に位置し、蟹田谷、丹後ヶ谷、七里ガ浜東、七里ガ浜の住宅団地に囲まれている。鎌倉市全域の人口密度より高い人口密度を呈す腰越地域に位置する（平成 15 年 11 月現在、鎌倉市全域：人口 168,881 人、人口密度 4,272 人/km²、腰越地域：人口 25,564 人、人口密度 6,072 人/km²）。広町地区の大部分は、市街化区域（主に第一種低層住居専用地域）に指定され、宅地化が進んだ市街地に残された緑地である。

広町地区の周辺は、鎌倉時代には京都から鎌倉に入る大手（玄関口）で、緑地東側の霊光寺は日蓮霊場のひとつである等歴史・文化資源が多く点在し、また対象地東北部を含む鎌倉山は、市内でも桜の名所とされ、春になると多くの人々が訪れる。広町地区は、歴史・文化・観光資源等と一体となり、古都鎌倉の風致を形成している。

また、そのほとんどが風致地区に指定されているが、歴史的風土保存区域・歴史的風土特別保存地区指定はされていないが、その一部は、市条例等による緑地保全契約や保存樹林の指定がなされている。



図 2-1 周辺の社会環境 ※都市計画図に加筆



図 2-2 鎌倉市歴史的風土保存区域・風致地区等指定図

(2) 自然環境

鎌倉市域は、南部を海に面しているため、特に海の影響が強く、気温較差も比較的少なく、温暖良好な気候を示している。（鎌倉市内の年平均気温：16.2、年間降水量：1489.2mm）。

鎌倉市域の地形は、丘陵地（谷戸と呼ばれる細かく入り組んだ谷が分布）と沖積低地に大きく区分され、谷戸を流れる河川は、東部が滑川水系、北西部が境川水系を形成し、その他の河川は相模湾に直接流下している。広町地区は、鎌倉市域の丘陵地の一角を形成し、御所ヶ谷、竹ヶ谷、室ヶ谷等の谷戸により複雑に入り組み、急傾斜地を多く含む地形となっている。

このような気候・地形から、広町地区はヤブツバキクラス域に属し、ヤブコウジ-スダジイ群集が潜在自然植生（内陸部丘陵地）と考えられるが、古くからの人的影響によりオニシバリ-コナラ群集に属するコナラ二次林の代償植生が多くを占め、常緑広葉樹自然林（スダジイ林）や渓谷生落葉樹自然林（イロハモミジ-ケヤキ群集）またスギ・ヒノキ植林も比較的広い面積で分布（内陸の谷部や斜面地の下部等）している。

鎌倉市は、丘陵地まで及び住宅地や工場地等が全体の約 6 割を占め、森林は約 3 割である。また河川改修が進み、山間に残された灌漑用水池も潰されたものが多く、水系は概して貧弱である。しかし広町地区は市街地にまとまって残された自然環境として、暖帯性の気候・複雑な地形とあいまって野生生物にとっても優れた生息環境となっている。また三浦丘陵の主尾根へと繋がる枝尾根の先端に位置する広町地区は、海辺に近く、沿岸性の温帯気候の影響を受けて多様な生物生息環境を形成している。同時に、神戸川上流域として背後の緑とともに腰越海岸や相模湾の自然環境の保全に寄与している。

一方鎌倉市は、外来の動物が多いことも特徴で、在来種の生息を圧迫する等、生態系に影響を及ぼす危険性ははらんでおり、広町地区でもタイワンリス、アライグマが確認される等、在来種への影響がすでに表われている。

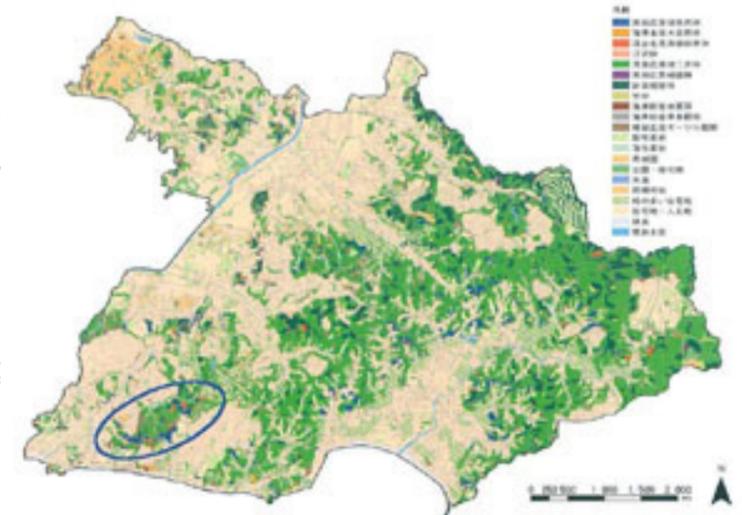


図 2-3 鎌倉市の現存植生 自然環境調査より引用

表 2-1 鎌倉に生息する動物の近年の動向

哺乳類	・ハビシ、アライグマ、タイワンリス（外来種の動物）が増加 ・タヌキが減少、アマガミやヤマネは絶滅の可能性が高い ・近年移動中の離れザル（コガザル）が時々目撃される
鳥類	・カシ、シロハラ等の冬鳥の越冬が増加（温暖な気候と谷戸地形） ・アオゲラ、コガラ等のツバメ類が増加（雑木林の荒廃） ・オジロ、ムクドリ等が減少（田畑の減少）
爬虫類	・マガメ（本来西日本に分布）やミシジキアマガメ（外来種）の野生化 ・ムシ等のヘビ類が減少（都市化の影響、環境変化や植物不足等）
両生類	・カエル類（コホアカガエル、シロゲルアカガエル、ツバガエル）が減少（田圃の減少）
魚類	・在来種減少、魚類層の単層化が進行（河川形態の変化、水質悪化、外来種の魚等の増加、ため池の減少と環境悪化） ・全国的に減少が著しいホトドジョウが、源流域に生息
昆虫	・温暖な気候や複雑な地形等により多様性に富んだ昆虫層が形成 ・一方で、昆虫層の衰退・貧弱化も進行 ・近年南方系種の進出（都市の温暖化）

自然環境調査をもとに整理

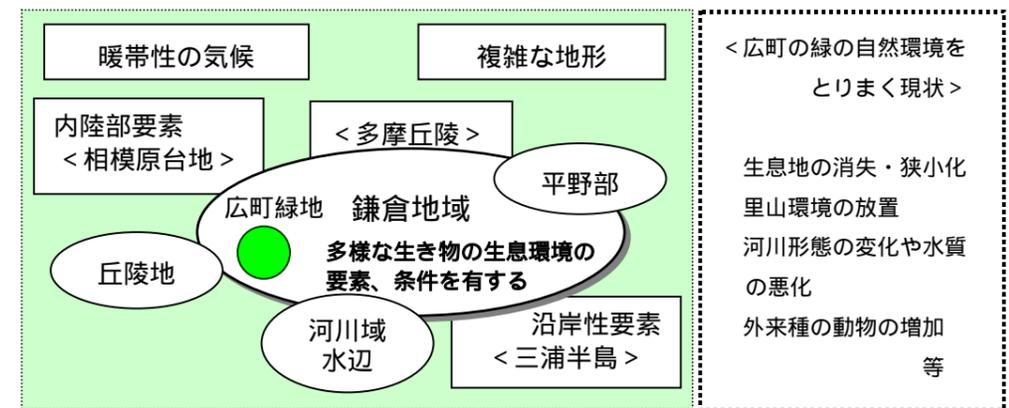


図 2-4 広町地区をとりまく自然環境

2. 自然環境の現状

自然環境調査の結果をもとに、広町地区の自然環境の現状について整理する。

(1) 地形・地質・土壌

広町地区は、谷戸が複雑に入り組み急傾斜地を多く含む地形となっており、もろくて風化しやすい凝灰質泥岩・砂岩からなる地質で多孔質で保水性がある。これは、岩にコケが付きやすくイロハモミジ-ケヤキ群集が特徴的に分布する等、広町地区の植生を特徴的なものとしている。

土壌は、山腹斜面上部から下部にかけて広範囲に褐色森林土が分布し、植物の良好な生育基盤となっている。

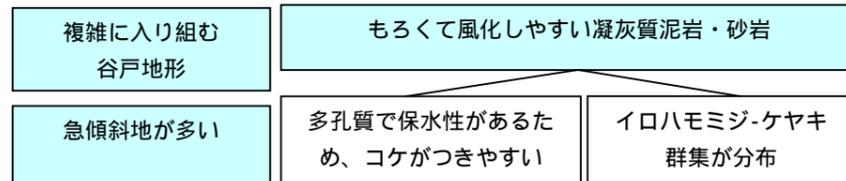


図 2-5 広町地区の地形・地質・土壌

(2) 植物

植生は、尾根部・斜面地では、自然林やコナラ林・ミズキ林等の二次林、スギ・ヒノキ植林、竹林、サクラ林等の森林植生が成立し、尾根部平坦地・谷戸部では、畑放棄地乾生草地、湿生草地等の草地植生が成立している。

常緑広葉樹自然林であるスダジイ林は、地域の極相林である。また落葉樹自然林であるイロハモミジ-ケヤキ群集は、谷の急斜面に高さ 20m 以上のケヤキ、イロハモミジが生育し、自然林の状態がよく保たれている。

水田の跡地に成立している湿生草地は、ガマ類、セリ、アシカキ等が繁茂する湿原で、タコノアシ等鎌倉市で珍しくなった植物が生育する貴重な自然環境である。

(3) 動物

広町地区は、哺乳類、鳥類、両生類、昆虫類、魚類、底生動物等で多くの種の生息が確認され、良好な生息環境を形成していると考えられる。

哺乳類：貴重種としてカヤネズミが確認され、またノウサギ、タヌキ等の中型獣も生息している。

鳥類：食物連鎖の上位種であるオオタカやフクロウ、また多くの渡り鳥が確認されている。

昆虫類：湿性地にみられる種が比較的多く、ゲンジボタル・ヘイケボタルが生息している。

魚類：貴重種であるホトケドジョウの生息が、水路において広く確認され、湿地内の浅い水たまり等では、多数の稚魚も観察された。

底生動物：丘陵地から平地の細流、小川、用排水路等に一般に見られるものが確認されている。

緑地・水系の規模が大きくなるに従い水系環境の多様性が高まると考えられ、鎌倉市自然環境調査が行われた市内緑地では、最も確認種数が多い。

(4) 生物社会

広町地区の生物社会は、生産者としての緑色植物が、常緑から夏緑の樹林、乾生及び湿生の草地、藻類と多様であり、その多様さゆえに、それらを直接的に餌とする低次の消費者（各種昆虫類やその幼虫、植食性の鳥類等）も比較的多様となっている。さらに、低次消費者の存在が豊かなことを反映して、フクロウが生息し、オオタカ、ノスリ等の猛禽類がエサ場や休息の場として利用している。

現在の広町地区に生育生息する動植物の種リストから見ると、かなり豊かな生物相を維持し、都市近郊の自然域として貴重なものとなっていると考えられる。ただし、かつて人手が加わることにより維持されていた湿性地・林床を、今後自然の遷移に任せた場合、乾燥化等で生物相の単純化の進行が予測され、その結果、現在の生物社会の多様性は低下するものと考えられる。



図 2-6 生態系ピラミッド 鎌倉市自然環境調査-概要版-より引用

また自然環境調査では、広町地区を含めた鎌倉市内の緑地（22 地区）について、自然環境の特性解析を行うため、陸域生態系の単位空間となる集水域（鎌倉市の谷戸の規模に相当する 2~5ha）毎に、指標として設定した生物種・群の多様度を算出している。この結果によると広町地区は、御所ヶ谷の下流域や竹ヶ谷等、谷戸部を含む集水域を中心に多様度が高く、調査を行った緑地の中でも高い水準にある。（多様度の算出結果等については自然環境調査報告書を参照）

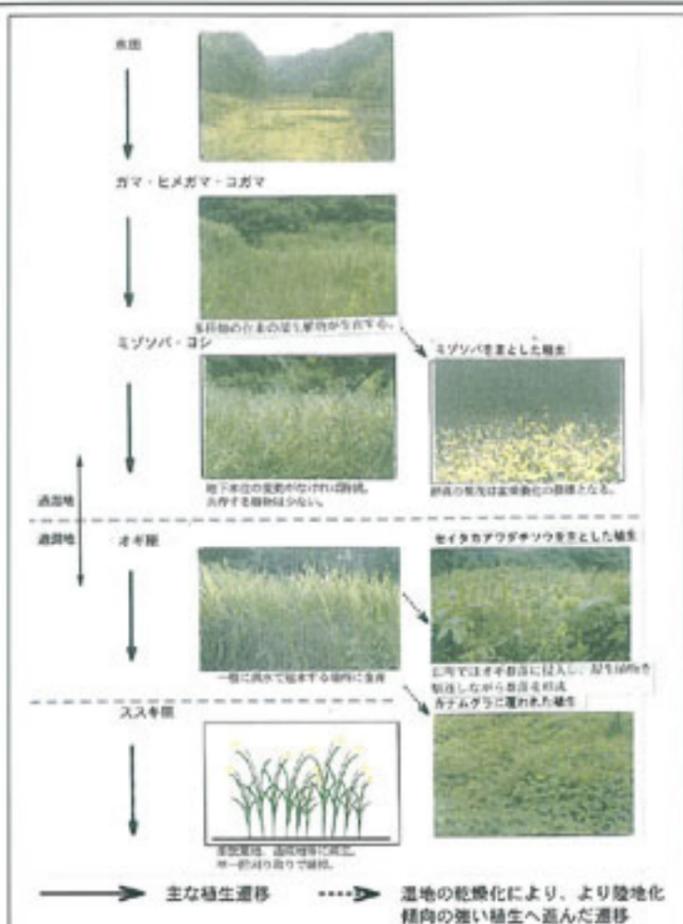
広町地区は、地形や水分条件等の違いによって様々な特性を持つ集水域が集まり多様性の高い谷戸の環境を形成していることが特徴である。広町地区では、集水域とそれらが一体となった谷戸（御所ヶ谷、竹ヶ谷、室ヶ谷）を単位として、生物社会の基盤をなしていると考えられる。

しかしながら広町地区は全般的にスダジイやタブの森林へと移り変わりつつあり、特に手入れしながら維持されていたコナラ等の雑木林では林床にササや常緑低木が繁茂し、雑木林に依存していた一部の昆虫や野草が減少しつつある等、生態系に大きな影響を与えている状況にある。

3. 市民活動等の現状

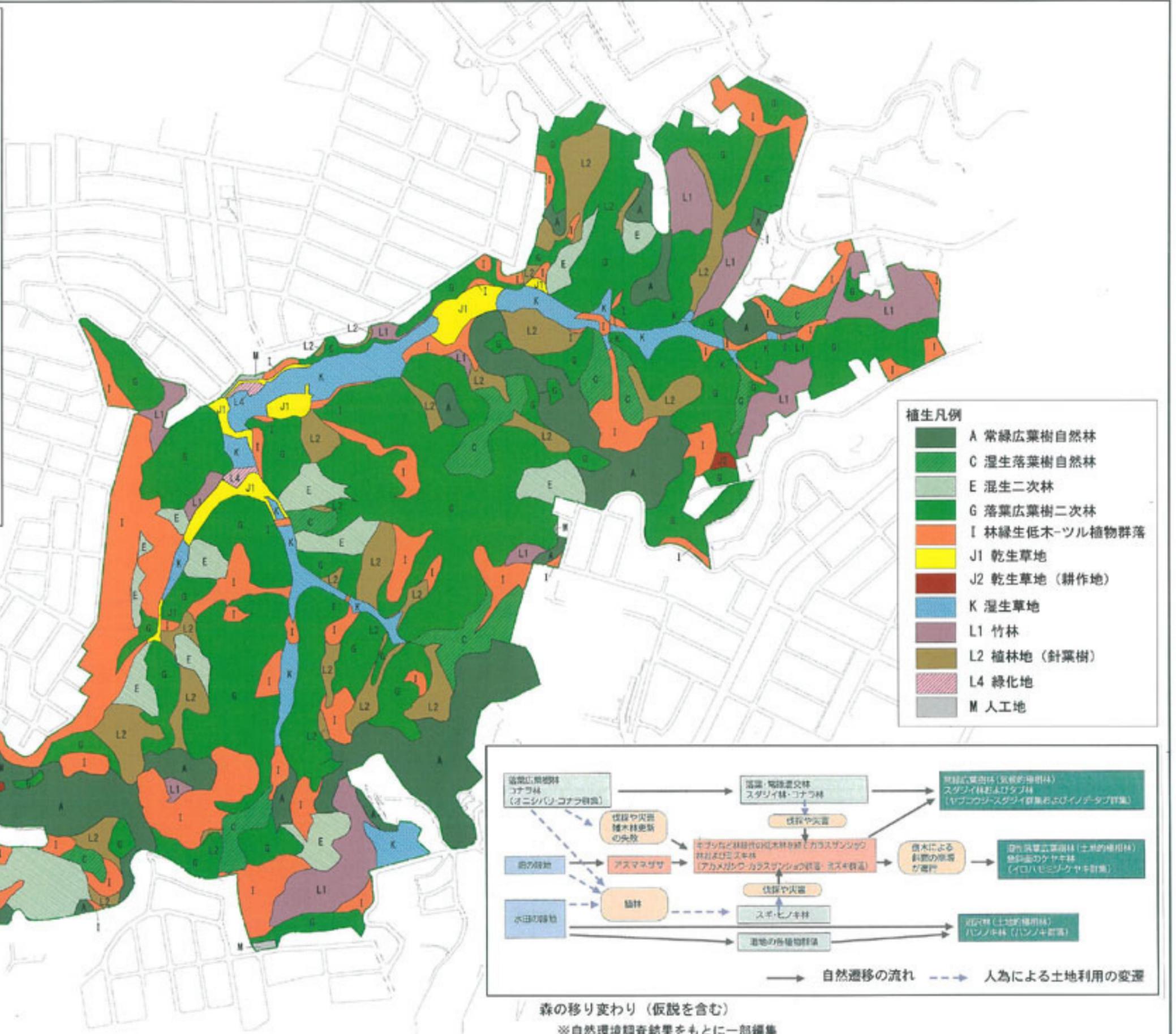
鎌倉市内の緑地に関わる市民団体が、各々独自の活動を行っている。その中で「鎌倉の自然を守る連合会」、「NPO 法人鎌倉広町台峯の自然を守る会」、及び「鎌倉ものものの道グランドワークトラスト」等が様々な活動やトラスト運動を展開している。

また広町地区をフィールドとして活動を展開するため「鎌倉広町の森市民協議会」が新たに設置され、活動を開始している。

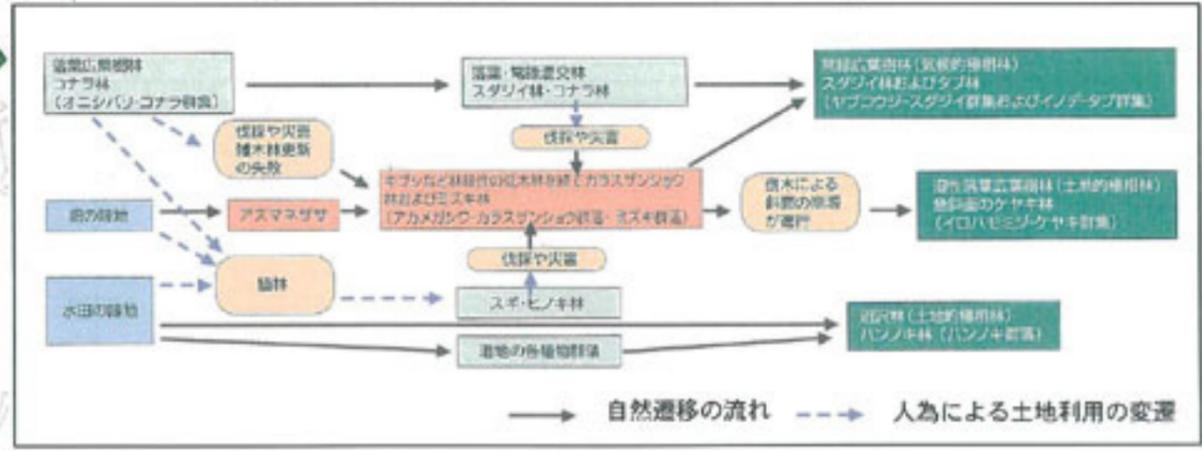


谷戸部の湿地バリエーション

※自然環境調査結果をもとに作成図は、谷戸部における主な植生と遷移の流れを示している。



- 植生凡例
- A 常緑広葉樹自然林
 - C 湿生落葉樹自然林
 - E 混生二次林
 - G 落葉広葉樹二次林
 - I 林縁生低木-ツル植物群落
 - J1 乾生草地
 - J2 乾生草地 (耕作地)
 - K 湿生草地
 - L1 竹林
 - L2 植林地 (針葉樹)
 - L4 緑化地
 - M 人工地



森の移り変わり (仮説を含む)

※自然環境調査結果をもとに一部編集

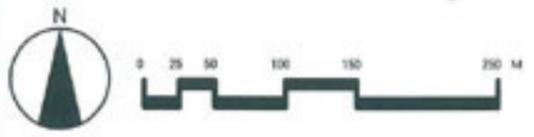


図2-7 現存植生図 5

※自然環境調査結果をもとに一部編集

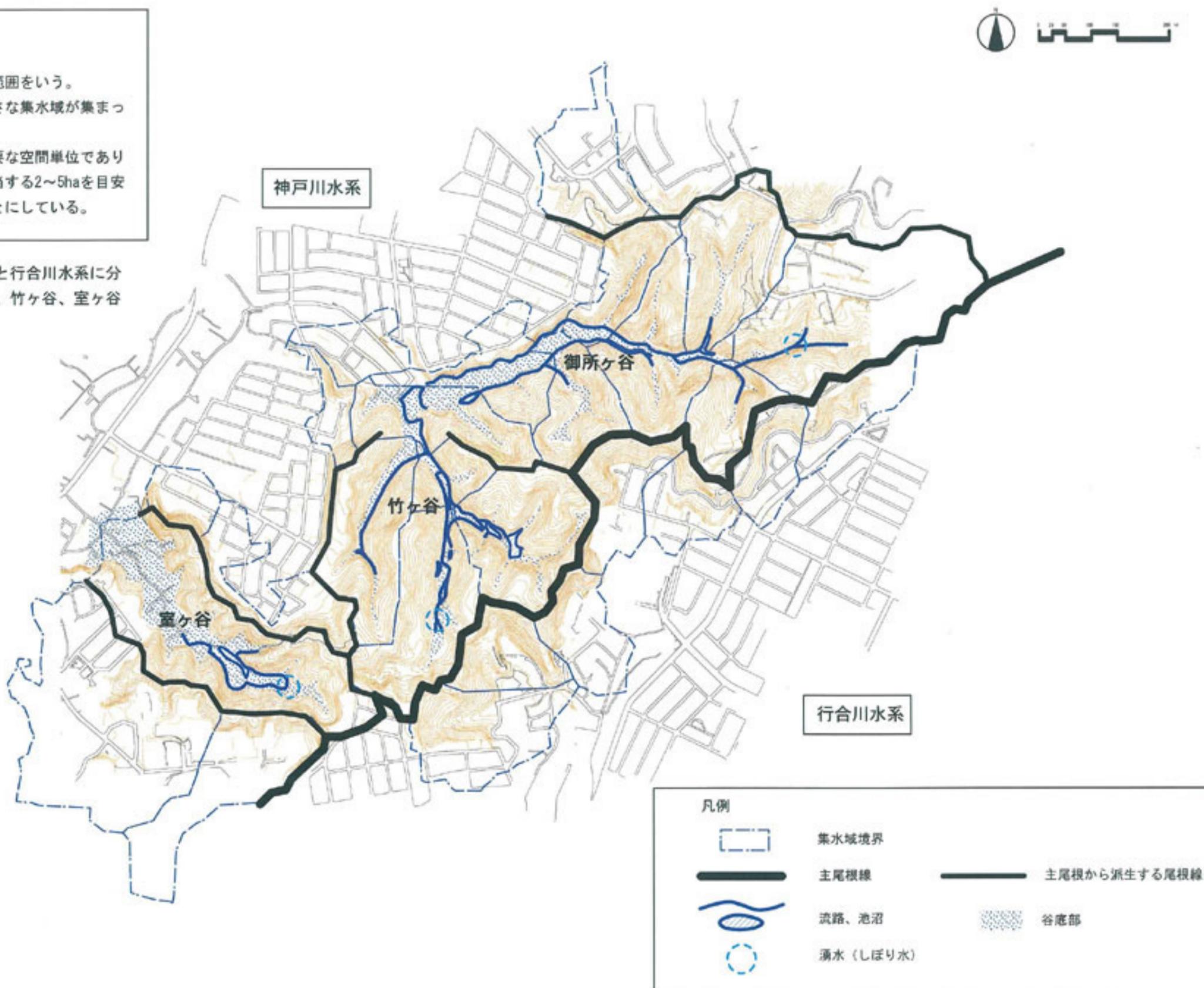
「集水域」とは

尾根に囲まれた降水に由来する表流水の集まる範囲をいう。

集水域は大小さまざまに捉えることができ、小さな集水域が集まって広くは河川の流域を構成する。

集水域は、陸域生態系の基盤をつくる一つの重要な空間単位でありここでは、鎌倉における標準的な谷戸の規模に相当する2~5haを目安に集水域を区分している自然環境調査の結果をもとにしている。

広町地区は、主尾根線を境界に、神戸川水系と行合川水系に分かれており、神戸川水系については、御所ヶ谷、竹ヶ谷、室ヶ谷の三つの谷戸で構成されている。



凡例	
	集水域境界
	主尾根線
	主尾根から派生する尾根線
	流路、池沼
	谷底部
	湧水（しほり水）

図2-8 広町地区を構成する谷戸と集水域図